

トビウオは鳥類か？

つい最近NHKテレビが2度までも「トビウオ」特集番組を放映した。今なぜ「トビウオ」なのか？ NHKによれば、今年5月鹿児島沖でトビウオが尾びれをたたきながら水面を45秒も飛行し続けた映像は過去最長なのだという。

このトビウオはわれわれの人智や想像を超えた曲芸をやったのける。NHKの映像は、魚でありながら、空中を「飛ぶ」から、「飛び続ける」特異な魚のイメージを訴えた。その飛ぶ様子を空陸多彩な角度から撮影し見せてくれたのである。鳴り物入りで紹介しようとするNHKの意図は、トビウオが集団となって飛翔する映像だと期待を抱かせた。しかし、飛行距離はともかく、番組では残念ながら数匹のトビウオが長く、遠くへ飛ぶ姿を見せてくれただけに過ぎなかった。これに似たシーンは、見ようと思えば屋久島近海で船上からだって見ることができる。これでは「想像を絶する」トビウオの曲芸とは言えない。

トビウオの曲芸とは、トビウオが数十尾の大集団となって海中から空へ飛び出し旋回して、海中へ飛び込み、再び空へ一団となって舞い上がり、その旋回する光景を何度も繰り返すことである。これこそ魚ではなく鳥の群れである。正にトビウオの曲芸と呼んでもよい。どうしてNHKはトビウオにあれほど接近しながら、トビウオの「お宝的な」鳥のシーンを捕えられなかったのか。答は簡単である。荒れ狂う大波の中で決死的な撮影をしなかったからである。

たった一度だけぞっとする体験の中で、トビウオの曲芸を見た。30年ほど前大荒れとなった中部太平洋の外洋、ペリリュー島からアングウル島へ小さなスピードボートで向かった時だった。木の葉のように揺られながら逆巻く大荒波の中で驚愕と恐怖を味わった。その眼前に鳥の飛来があった。何とこれこそトビウオの躍動だった。群れとなって消えては現れ、また消える。とても魚のイメージではなかった。まるで幻想を見ているようだった。転覆せんばかりの大波頭の直下でなければ、とてもトビウオは鳥となってくれない。だが、もう一度見たいと思っても、命からがらの体験はもうごめんた。(近藤)